

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

母子のくすぐり遊びにおける
相互作用の初期発達

Early development of mother-infant interaction
in tickling play

2020年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

石島 このみ

ISHIJIMA, Konomi

研究指導担当教員： 根ヶ山 光一 教授

身体接触は、乳児とかかわる上で欠かせないコミュニケーションチャンネルである。身体接触と一口に言っても、触り方によってその様相は様々であり、身体接触のタイプや身体接触が生じる状況・文脈によって、コミュニケーションの中でもたらされる意味や機能が異なる。本研究では、身体接触を伴う関わりの中でもくすぐり遊びに焦点を当て、そこにおける母子の相互作用の初期発達について検討し、発達初期におけるくすぐり遊びの意義や機能について考究した。

第1章では、身体接触に関する先行研究について概観するとともに、くすぐり遊びに着目する理由について論じた。自分では引き起こすことができず、また快と不快が混合された「くすぐったさ」を核としたくすぐり遊びは、自他理解や情動共有、間主観性といった発達心理学的に重要な問題が複雑に絡み合った場といえる。根ヶ山・山口(2005)は母子におけるくすぐり遊びの発達について検討し、乳児の強いくすぐったがり反応は生後約6・7ヶ月頃以降に発現しはじめ、生後約12・13ヶ月では、くすぐりの誇張や遅延化、歌遊びなどの筋書きがあるくすぐりがみられることを明らかにした。そして、生後7ヶ月の乳児が強いくすぐったがりを示すようになることは、この時期の子どもが母親を他者として理解し、その母親の楽しさや意図を読みとりながら体験を共有していることを示唆するとした。しかしながら、生態学的妥当性の高い場面での母子のくすぐり遊びにおける相互作用とその初期発達を扱った研究は、ほとんどなされてこなかった。

これらをふまえ、第2章では、本研究の目的と全体的枠組みが示された。本研究では、くすぐったがり反応が生じはじめる生後5ヶ月～7ヶ月頃の母子を対象として、くすぐり遊びにおける相互作用の初期発達について、縦断的研究(研究1)と横断的研究(研究2)により検討した。研究1では、家庭において観察を行い、母子のくすぐり遊びにおける相互作用の発達と、意図理解がなされている可能性について検討することを目的とした。研究2では、くすぐり遊びにおけるくすぐったさは反射によるものか、それとも社会的なものかという論点をふまえたうえで、子育て支援施設にて観察を行い、生後半年前後のくすぐり遊びにおけるくすぐり行動・くすぐったがり反応の発達の一般的傾向について明らかするとともに、くすぐり遊びにおけるコミュニケーション的側面に着目し、母親のくすぐり行動や乳児による母親の顔への注視、母親の笑いといった社会的ファクターと、乳児のくすぐったがり反応との関連性について検討することを目的とした。

第3章では、第2章にしたがって研究1・2の方法・結果と考察が示された。研究1では、観察開始時生後5ヶ月の母子1組を対象として、3ヶ月間縦断的に行動観察し、分析を行った。その結果、生後6ヶ月頃から「くすぐりの焦らし」のような、意図の読

みとりが容易になるようなくすぐり方が母親によってなされはじめていたことがわかった。生後6ヶ月半頃には乳児によるくすぐり刺激源（母親の手）と母親の顔を対象とした交互注視が見られ、その頻度は発達的に増加した。また、くすぐったがり反応が生じたくすぐり遊びの事例では、「くすぐりの焦らし」において乳児による予期的なくすぐったがり観察された。このことから、乳児がくすぐり遊びにおいて萌芽的に母親の意図を読み取りながら能動的にくすぐり遊びに参加しており、母子が互いに相互調律しながらナラティブを共創・共有していることが示唆された。研究2では、生後約5ヶ月から7ヶ月の乳児とその母親、合計22組を対象として行動観察を行った。分析では、母子は生後5ヶ月と7ヶ月の2つのグループに分類された。また母親のくすぐり行動を分類し、「くすぐりの焦らし」や「歌にのせたくすぐり」のような、次の展開の予期を容易にさせるような工夫がなされたくすぐりを「ナラティブありのくすぐり」、母親が前触れなくすぐに乳児の身体に触れるくすぐりを「ナラティブなしのくすぐり」と定義した。分析の結果、ナラティブありのくすぐりは生後5ヶ月頃よりも7ヶ月頃においてより多くの母子ペアにおいて生じ、乳児の強いくすぐったがりも同様の傾向があることがわかった。このことから、特に母親のくすぐり行動に関して、7ヶ月の時点で質的に変化する可能性が示唆された。また、乳児の強いくすぐったがりには、くすぐりにおける社会的ファクター（乳児による母親の顔の注視の有無、母親によるナラティブありのくすぐりの有無、母親の笑いの有無）と有意な関連性があった。これらの結果から、乳児のくすぐったがり反応が社会的ファクターと有意に関連しており、乳児は単にくすぐったさを感じていただけでなく、ナラティブを理解したり、母親の顔を見たりしながらくすぐり遊びに参加していたことが示唆された。

第4章では、得られた知見をもとに、総合考察がなされた。従来、乳児よる他者の意図の読み取りは、生後9ヶ月頃に成立する乳児—物—母親という三項関係における共同注意の場で議論がなされてきた。母子におけるくすぐり遊びは、本来は二項関係的なやりとりである。しかし、くすぐる・あるいはくすぐられる身体（そこで生じる「身体感覚・くすぐったさ」）を注意の対象としたとき、その場は三項関係的な性質を帯びる（原三項関係；Negayama, 2011；根ヶ山, 2012）。そこにおいては、二者の身体性の重なりをベースに、その一部位に両者が焦点を合わせて対象化し、くすぐったさという同じ感覚を共有していると推察される。これは三項関係における共同注意の前駆的体験であると考えられた。また生後7ヶ月頃の母親によるナラティブのあるくすぐりには、ヒトにおける「くすぐったさ」という独特な身体感覚とそれへの共感性を下敷きとしながら、二項関係から三項関係へと乳児の社会性を認知的に高次なレベルに引き上げるような、身体性を基盤とした認知発達の足場づくり的な機能があると考察された。くすぐり遊びのような母子の日常においてなされる身体接触を介した自然なやりとりにこそ、他者の心の理解につながるような、乳児の社会認知的能力の発達を促すメカニズムが埋め込まれている可能性がある。